

第3回ホリスティック医療塾 報告書

テーマ：ホリスティックケースカンファレンス

日時：2011年5月27日（日） 午前11時～午後0時30分

場所：関西医科大学滝井学舎 本館会議室

コーディネーター：愛場庸雅（日本ホリスティック医学協会関西支部）

ホリスティック医療塾第3回は、「ホリスティックケースカンファレンス」としました。実際に参加者が経験した症例を振り返り、ホリスティックアプローチとして、どのようなことが考えられ、どのようにすれば良かったかなどを、自由にディスカッションしようという試みです。

まず、緩和ケア医である関西支部長の黒丸が体験した、症例を呈示しました。比較的若い年齢のがん患者さんで、当初の医師への不信感から、通常の医学的治療を拒否し、極めて全身状態が悪くなってから外来を受診された人です。

とりあえず急場の処置を行えば、しばらくは全身状態を保てそうだが、拒否的態度の患者にどう対応するのか？ 急場をしのぐ処置をやり終えたとして、次に治療的な介入はどうするのか？ 治療に対して、患者の思いはゆれているが、それにどうかかわってゆくか？ 患者とその家族との関係に問題があるようだが、その点についてのアプローチはできるのか？ さらに末期の状態になっていった時に、患者とのかかわりをどうするのか？ 最後の望みを叶えるための可能性はあるのか？

このような課題を持った具体例に対して、どのように考えるのか。活発なディスカッションが行われました。もちろん正しい回答というものは無く、色々な意見が交わされる中で、気づかされるが多々ありました。出てきた意見はさまざまでしたが、まとめることは出来ないので、順不同で羅列します。

とりあえずの緊急事態は回避しなければならないだろう。だが、「治す」ことを患者は望んでいるのか。本人の考え方や、希望、死生観をじっくり聞きたい。患者の今の生き方に焦点をあてる。「医療不信」と「自己否定」によりそうことが必要。叱ってでも治療しないといけないこともある。治療の方法は、まだある。免疫療法、食事療法、民間療法などいろいろ。しかしコストもかかる。心理的アプローチ、スピリチュアルな転換で退縮の可能性もなくはない。患者の生きる希望を見出せないか。家族との問題が大きい。患者も、がんが何かを自分に伝えようとしているという認識を持っている。自分の行動の矛盾にも気付いている。家族へのアプローチも必要。本人が自分の気持ちをわかってもらえる人の存在が必要。最後はやはりキーパーソンの家族と本人の関わりである。

次回の医療塾（第4回）は9月23日に開催の予定です。